

す。

「二揆」によって導かれた紛争解決のための具体的な内容は、現在の裁判のように勝ち負けがはっきりしたものではなく、いわば「和解」的な解決方法を示すものではありましたが、少なくともその根拠にあったのは「理非を糺す」考え方という確固たるもの。一般的に「昔ながらの日本人的解決」としてイメージされる、「これ以上事を荒立て、長引かせてもお互いの得にはならないだろう、一つここは少しずつ譲歩してなんとか円満に解決したらどうだ」といった、主張の内容を吟味することよりも、その「場」に即して馴れ合的に解決することに価値を置く解決方法とは、基本的な考え方がまったく違うということがわかりただけでしょう。

「作られた」理解から「本当の」理解へ

そういう事実があるにも関わらず「日本人は訴訟が嫌い」という認識が大手を振ってまかり通っているのは、鎌倉時代以降、紛争が起った際に、「和解」を良しとしたり、あるいは、高権力によって「和解」が半ば強制されていたと見られる史料があることから、いつの間にか

それらが結びつき、膨らんで「日本人は和解を好む」というまことしやかなストーリーに仕立てられ、日本人の紛争処理のあり方の前提となる理解として影響を与えてきたからではないかと私は見えます。根拠となるものがあいまいであるにも関わらず言説だけが膨らんだ、いわば、結果として「作られた」理解なのではないかと推察しているのです。

今挙げたのは一つの例ですが、同様に、我々が当然だと思っている事柄の中には、他にも「作られた」理解がたくさんあるのではないのでしょうか。日本では、明治期に国のあり方が大きく変わったため、それ以前の物の考え方が近代的な枠組に取り込まれる過程においてさまざまな歪みや不正確さを生じ、その結果、根拠があいまいなまま「作られた」理解がまだまだあるのではないかと考えられるのです。

学説の流れを丹念に見ていくと、国のあり方や外国との関係など、時代の空気を反映して、歴史的事実に対し知らず知らずのうちにフィルターがかかけられ、人々はそれを通して見た事実を「事実」として理解していることに気がつきま

す。そんなフィルターをできるだけ排し、

純粋なオリジナルに近づいて、「本当のこと」を見極めたい。日本中世の法制史というマイナーな分野で、私はそのようなことを考えつつ史料に当たっています。それは同時に、どの時代に、どんな事情で、どんなフィルターがかかけられたのかを明らかにする作業でもあります。それを一つひとつ点検していくことで、物事の本質により近づきたいと願っています。

世代を超えて

古臭いと評される学問の対象であつても、冷静に見直して、誤解があればそれを解きながら、より本質的なものをえぐり出し、次の世代に伝えていく。この作業は、戦前の伝統的な教育を受けた先生方の時代から、戦後教育を受けた我々の時代へと移りつつある今、どうしてもしておかなければならない、我々に課された使命ではないかと考えています。学問の枠にとらわれず、広く一般の方にも共有できる知識や考え方を提供できればと考えています。(談)

(にしむら やすひろ)



日本人は訴訟が嫌い？

—伝統的な法文化理解の再検討のために—

西村 安博

(大学法学部教授)

日本人と法・裁判

「日本人は訴訟を嫌い、和解を好む」「裁判になる前に丸く収めるのが日本人のやり方」。いかにも当然のように、あたかもそれが古来日本人の本性であるかのように広く一般に理解されていることです。

私は、日本中世の法制史を研究する中で、中世の法制史料から紛争に関するものを点検し、紛争解決のスタイルの多様性を見るところ作業を進めています。主な関心事項は「紛争解決に当たって、当時の社会の中で法がどのようなかたちで機能していたのか」。そこには人々の法に対する考え方や、法的観念が投影されているからです。

その作業を通して、たとえば冒頭にあげた事柄を考えた時、必ずしもそうとは言えないのではないかということが見えてくるのです。

「二揆」にみる紛争解決のスタイル

南北朝時代から戦国時代にかけて、「にぎひ国人二揆」と呼ばれる、地域における利害関係を共有するために結束した在地領主の連合体が各地に存在していまし

た。連合に当たってはさまざまな約束事を取り決められ、「いっせきけいたくしゅう二揆契諾状」という盟約が結ばれていました。

九州、五島列島にあつた松浦党一揆の「二揆契諾状」の中に、紛争解決のための手続に関する約束事が書かれています。それによれば、紛争が発生した際に、自力で処理することは禁止されており、紛争当事者は必ず「二揆衆中」（二揆全体の意思決定の場）に対して訴訟を持ちかけることが大原則とされていました。

当時の社会では「りひ理非を糺す」、つまりどちらの言い分の方に道理があるのかを判断すべきだという考え方が基調にあり、「二揆契諾状」でも、その考え方に照らして双方の言い分を聞こう、とうたわれています。そして実際の紛争処理の場面では、双方の主張を十分に吸いあげた上で、状況に応じた具体的な解決法が和解（和与わよ）の体裁をもってまとめられ、その内容を「二揆」が保証するというスタイルがとられていました。これに関して、もし不都合が生じたような場合には、再度訴えることも可能でした。いわば現在にも通じる裁判のスタイルが、当時も合理的な紛争解決の手段として評価された上で、利用されていたので



吉本ギャグを科学する…?!

阪田 真己子

(大学文化情報学部専任講師)

文化情報学と身体論

私たちの生活を取り巻くあらゆる文化現象を、データサイエンスという手法を用いて科学的に実証するのが文化情報学です。美しい風景を見て心がやすらぐのはなぜか、日本人と東南アジアの人々のものの考え方にはどのような違いがあるか、流行る歌と流行らない歌の違いは何か、など文化情報学の研究対象は多岐にわたります。

私の専門は身体論です。驚き、怒り、悲しみなど予先がはつきりしている「感情」「情動」や、爽やか、すがすがしい、不安など直感的であいまいな「イメージ」や「印象」「雰囲気」「気分」など、人間のもつ感性に根ざす情報のことを「感性情報」といいます。どんな身体の動きからどのような感性情報が読み取られるかを解明する「身体動作の感性情報処理」が研究テーマです。たとえば私が大学卒業を目前にしていた時、同級生が単位を落として卒業できなくなったことがありました。私は大きな衝撃を受けて驚いたにもかかわらず、友人には私が笑ったように見えたそうです。これは典型的なコミュニケーション摩擦ですが、私の感情の表出の仕方、つまり記号化に誤りがあったのかもしれないし、友人が私の表情を読みとって解釈、つまり記号解読する

際にミスをしたのかもしれませんが。このように基本的なところで私たちが感性情報の表し方読み取り方を間違っていることは、日常茶飯事として起きています。そういう根本的な問題を改めて見直すことに、この研究の意義があると考えます。

吉本のギャグを3次的に分析する

動きから読み取られる感性情報の中には面白さ、滑稽さというものもあります。落語は耳で聴くだけでも面白いですが、目の前で聴くともっと面白いのは、そこに視覚的な作用が働くからです。そこで「面白い」という感性情報に身体の動きがどのように寄与しているのかを研究するため、吉本興業の協力をいただき、「笑い」と身体性」についての研究も行っています。

具体的にはmotion captureというシステムを利用して芸人さんの身体の動きをコンピュータに取り込み、ギャグの3次的な座標を得るという手法を用います。吉本興業さんの「パチパチパンチ」を例に挙げると、同じギャグを別の人にやってもらったときがぶれる。やはり島木さんにとって、また観客にとっても心地よいリズムというのがあり、見る側は島木さんの独特のリズムに基づいた動きを「面白い」と感じるわけです。池乃めだかさんの「猫まね」は、腰と頭が非常

に低い。頭より腰を高く保ったり、手の動きの緩急がとてもしどろりたりするなど、絶妙のタイミングがあることも分かります。島木さんやめだかさんのギャグが、お笑い名人芸として笑いだけでなく拍手をも巻き起こす根拠を、このようなアプローチで検証することができそうです。お笑い以外でも、日本舞踊やモダンダンス、また日常的な動作についても同様の方法で感性情報処理の研究を進めています。

身体現象を解析する意義

これらの実験結果から得られた数式は、身体現象を物理的な特徴で表すというなるかということを示します。たとえばこの数式をプログラムとしてロボットに与えると、ロボットがあたかも感情を持つているかのように振る舞うことが可能です。日本舞踊などの伝統芸能では「もつと」とか「もつと腰を入れて」という表現をすることがありますが、これは分かるようで分かっていない。これらの技言語を別の言葉に置き換える、つまり数式を「もつと曲線的に」など別の言葉に置き換えることで、師匠と学習者で共有できる新たな技言語が生まれるのではないかと試みも行っているところなんです。

踊り手が絶えると演目自体も途絶えて

しまうようなケースでは、これをデジタルアーカイブとして後世に残すことは大いに意義がありますし、島木さんやめだかさんのギャグも無形文化財として保存することに価値があるといえます。吉本新喜劇のお笑いについては、新喜劇の栄枯盛衰の歴史、いま吉本新喜劇が受けている理由の分析、大阪で人気のある吉本新喜劇がなぜ東北では受けられないのかなど、まさに文化と結びついた研究も行っています。このようなサブカルチャーからこそ見えてくるものがあるのです。

多面的なアプローチの重要性

文化を情報化するという考え方はまだ緒に就いたばかりですから、どんな現象をどのように計ればデータが得られ、そのデータをどう用いるのかということをも模索しながら研究を進めています。一つの現象に対するアプローチは一つとは限りません。かつて私はA+B=Cという要素還元的方法に従って身体現象の分析を試みていましたが、いくらやってもそのモデルでは説明しきれない現象があるので。なぜ今この人が「悲しそう」に見えるかという、「何となく」としか答えられない場合もあります。その時、哲学者メルローポンティの「人間の身体とは一つの表出空間である」という身体論に影響を受け、発想の転換を図ること

ができました。要素還元的な方法にとらわれるあまり、手足などの部分的な動きばかりを追及してしまい、分節不可能な「全体としての身体」が存在しているということ、空間そのものに身体が表出されているという根源的な事実を私は見逃していたわけです。そこで現在は既存の方法論にとらわれず、実験心理学や情報科学などの実証主義的な手法に加え、現象学など解釈主義的な方法論や、身体文化論、文化人類学などの文化論も参考に行われてきた研究の理論的枠組みを参考にしながら、身体への新しいアプローチを考え、研究を進めている段階です。

文理融合学部のメリットは、異なる手法を用いる教員が、一つの現象に対して各自の角度からさまざまな見方をすることにより、学際的な教育・研究ができる点にあります。私も教員として、学生の皆さんには多様な価値観、問題の所在を見つける力、一つの方法論にこだわらず多面的なアプローチができる力を身につけていただき、人間というものを包括的に理解できる力を養っていただきたいと思っています。(談)

(さかた まみこ)

薬学部「憩水館」から

岡部 進

(女子大学薬学部特任教授)



私の研究

私は今まで、胃や十二指腸に潰瘍がなぜ発生するのか、潰瘍はどのような薬で治療するのか、新しい薬物はどのような試験法で検定するかなどを研究してきました。胃酸（塩酸）やペプシンの分泌機構、両者の粘膜への侵食作用なども実験動物で検討しました。体の中で胃だけが高濃度の塩酸を分泌するということは、1830年に判明しました。近年になり、塩酸は、壁細胞にある $H^+K^+ATPase$ （プロトンポンプ）がATPを分解し、そのエネルギーを使用して分泌されることが判明しました。分泌された塩酸はステンレススチールをも溶解するほど強力であり、しかし、これほど強い塩酸を分泌する細胞が一体どういう理由で胃に発生したのか、すなわち、壁細胞の起源に関しては、誰一人考えたことがありませんでした。

壁細胞（胃酸分泌細胞）

数年前に、私はこの壁細胞の塩酸分泌機構が、細菌の栄養素の取り込みと共役した塩酸排出機能と類似していることに気がつきました。また我々の腸管に寄生している酵母のプロトンポンプとヒトのプロトンポンプの構造が類似しているこ

とを最近の文献で知りました。これらの事実から、壁細胞の起源はプロトンポンプをもった微生物が腔腸生物の時代に腸内に共生し、その遺伝子を宿主に移したのではないかという仮説を提唱しています。つまり、壁細胞が胃に存在するのは、食物を消化するという必然の進化の結果ではなく、遺伝子の偶然的移行の結果ではないかと思っております。私と共同研究者は、原索動物のホヤには胃はありませんが、壁細胞（プロトンポンプ）はないことを証明しました。ヤツメウナギ、メクラウナギでも検討しようと考えましたが、この両生物には胃がありませんでした。「生きた化石」のシラカンスの胃も検討しましたが、残念ながら捕獲時の処置が拙く、壁細胞は破壊されていました。

大山椒魚

そこで、シラカンスと同様「生きた化石」といわれる大山椒魚の胃の壁細胞のプロトンポンプの構造を解明して、壁細胞の進化の過程を検討しようと思っております。3000万年の間進化が止まっている生物の壁細胞のプロトンポンプの構造解明は、単に壁細胞ばかりではなく、生体に存在する約200種の細胞の

起源の解明にも役立つはずです。大山椒魚は日本では天然記念物として指定されているので、新鮮な標本を得ることができません。棲息地を調査した結果、中国にも棲息していることが判り、また上海水産大学で大山椒魚を養殖している学者とコンタクトがとれました。この夏期休暇を利用して上海にかけ、大山椒魚の胃の機能の検討、および胃の一部を頂いて帰国後、プロトンポンプの構造を解明する予定にしています。中国では、養殖されている大山椒魚は食料などに使用可とお聞きしました。幸い、プロトンポンプの構造解析では世界的に著名な和田戈虹博士が本学薬学部の生化学研究室の助教授をされておられますので、共同研究者として参加して頂くことになっていきます。以上、壁細胞の進化の過程に関する研究が一段落したら、つぎは、ヒトの進化に関する仮説を提唱しようと思っています。ヒトはチンパンジーの従兄弟ではない。ヒトはヒト、チンパンジーはチンパンジーになる独自の遺伝子をもつてこの世に出現したという仮説です。

私の授業

この4月、同女大に薬学部が新設され、第1回生として約150人の学生が入学

しました。現在基礎科目（語学、生物、化学、数学など）、聖書、第2外国語としてのラテン語（必修）、生薬学、英国人による薬学英语、薬学概論、医学概論、などを受講中であります。また「くすり」へのモチベーションを高めるために、「調剤学入門」という実習も受けています。ペテランの教授指導のもと、特任助手全員の協力により、メンソレータムなどを自ら作製しています。私は「薬学概論」を担当し、「くすりのきた道」と黒板に大書し、くすりの歴史から始めていきます。地理、関係する人物の肖像、写真などを紹介するために、パワーポイントとそのプリントを使用しています。文明発祥の地イェリコのミイラからアラビアの錬金術時代を終えて、漸く阿片からモルヒネの抽出成功の時代に至っています。また現役の医師による「医学概論」の講義も同時進行中であり、早い時期に医療への理解も得て、学年の進行と同時に、薬学への理解が深まり、4年後には同女卒らしい実力溢れる薬剤師となつて、社会で活躍して欲しいものだと思っております。

同女のキープレース

嬉しいことに、新入生二人の母親、一

人の叔母は私が以前に勤務していた京都薬科大学で、私の講義を受けられたとのことでした。講座を担当して以来27年が過ぎているので、当然といえば当然ですが、かつて薬学生として受講していた人の娘さんに再び講義室で会えることに感動し、また歳月の流れを感じました。昨年は、生活科学部で講義しましたが、受講生の一人の母親も薬大卒で、私の講義を聞かれたようでした。今出川の私の居室にお寄り頂きましたので、すっかり妙齢の婦人になられた元学生さんと現学生さんと暫くの間お話ができました。25、26年前に、学園ニュースに書いた私の文章の一部を覚えておられ、驚きました。この春同女大の薬学部に入學した第1回生が、いつの日か母親となり、またその娘さんが同女大に入學され、次々と同女大の良き伝統の下で教育を受けて欲しいと思っています。今出川のジェームス館の廊下の風景を撮したパンフレットに、「曾祖母も、祖母も、母も、私も」と同女大の歴史を見事に表現した言葉が書かれています。新参の薬学部も他学部と同じように、このフレイズを胸に抱いて母校の発展に寄与されることを心から願うこの頃であります。（おかべ すすむ）

高校3年 「総合的な学習の時間」

水谷 亘

(女子中学校・高等学校国語科教諭)



はじめに

二つの国際的な学力調査結果（国際学力到達度調査と国際数学・理科教育動向調査）を踏まえて、改めて、近年の子どもの学力低下問題が、メディアを賑わした。そして、その矛先は、学校五日制や、総合的な学習の時間といったものに向けられ、こういったものの意義が疑問視されるような場面もあった。

しかし、これらの調査結果で下降傾向にあるとされたポイントは、特に文部科学省が総合的な学習の時間の「ねらい」として掲げているポイントであり、そういう意味でも、今後の子どもたちの成長を考える上で、この科目の持つ意味は少なくないものと思われるのである。

さて本校では、2002年度より、この「総合的な学習の時間」をスタートさせ、昨年度（2004年度）漸く全学年で展開するに至った。国語科は、そのうち高校3年生を担当することになっており、その最初の年を筆者が受け持つことになった。以下、この1年間で展開した

授業を振り返り、述べてみたいと思う。

一学期の学習

まず一学期は、「読む」ということに焦点を当て、授業を展開することにした。新島襄は、国禁を犯して、函館から米国を目指した。新島の心を遙かなる米国へと駆り立てたもののひとつに『聯邦志略』があげられる。米国人宣教師ブリッジマンによって書かれたこの書物は、米国の各州に就いて、或いは国全体の政治、文化等の事柄が、漢文で記されている。江戸末期には、我が国でも印刷出版がなされたようで、高杉晋作などもこれを読んだらしい。新島は、この書を読み、後年、「脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した」と述懐している。

この新島の感動を、何とか子どもたちに伝えることはできないか、と考え、これを全員で書き下すことにした。班毎に分担を与え、ほぼ一学期中を使つての作業となった。実を言えば、この作業、一番辛かったのは、生徒ではなく、担当のわたくしの方であつたかもしれぬ。毎回、

授業終わりに、その日にやった分を提出

させて、それに朱を入れて、その日のうち、若しくは翌朝には返却する、これをまるまる一学期間続けた。生徒よりも、こちらが先に挫折しそうになることもあったが、どの班も回を追う毎に、間違いが少なくなり、作業の速度も速くなつてきて、その成長ぶりに励まされつつ、やり遂げた、という感じであつた。

すべての作業を終えた後、生徒たちに感想を書かせた。こちらが考えもしなかったような部分、例えば川の大きさの記述など、からも生徒たちは新島の驚愕を想像していた。最初、彼女たちに「君たちは新島嬢だ」と言い、その気にさせて、進めてきたが、若しこの作業から、少しでも何かを感じ取ってくれたとしたら、と思っている。

二学期の学習

二学期は、「話す」に主眼を置き、ディベートを行った。

まずディベートに就いて、パワーポイントを用いて説明した後、実際にディベ

ートをしている模様をビデオで見た。

高校生が、ディベートで学ぶことは多くあると思う。「相手の出方を予測して、それに対応する手を予め考える」や「調べた事柄のうち、どれをどの順で出していくか」といった戦略のたてかたを学ぶのは無論のこと、「ルールを守ってゲームを行う」というような基本的な事柄や、「引用する際は出典を明記する」といった著作権に関わるような事柄も同時に学んでいくことになるからである。とりわけ、引用明記の問題は、殆どの生徒が、これから大学へと進学していく本校のようなかたにあっては、是非とも身につけさせたい事柄であるように思われる。

三学期の学習

三学期（正確には二学期の後半からであつたが）は、「書く」に主眼を置いた学習を行うこととし、これで高校生活を終える彼女たちに、「卒業研究」を書いて提出してもらうことにした。テーマは自由に設定してよいが、各自が自分の将来の進路をも見据えながら考えてほしい

旨を伝えた。例えば、経済学部に進学する生徒で、サッカー（Ｊリーグ）が好きな生徒などは、「あるチームがある地域に本拠地を構えること」の「経済効果について」といったテーマで進めていく、などというように、各自が「自分にしか書けないもの」を書くように指導した。また、この学習の中で、特に口を酸っぱくして指導したのは、「自分の意見を自分の言葉で表現すること」である。簡単に言うに聞こえるが、情報過多とも言つべきこの世の中に於いて、これはなかなか難しいことであるようだ。

おわりに

この授業で行ってきたことは、つまり、「正しい情報の取捨選択」「自分の意見を自分の言葉で伝達すること」「引用出典の明記」の三つに集約することができると思われる。地味で基本的な事柄ではあるが、こういう力を身につけた生徒を送り出したいと考えている。

（みずたに わたる）

り、チアダンスを研究し始めました。そのころから生徒たちのエネルギーに私は驚いていました。最初は、私が1年目に担任をしていた生徒2人からはじまり、その2人が友達を誘い、そしてまたその友達……というようにして高校1年生10人と、2年生4人が集まりました。ダンス部の中の彼女達の活動がスタートしました。

人を応援すること

本来、アメリカカンフットボールとチアリーダーは切っても切り離せない関係であり、ハーフタイムショーも含めアメリカカンフットボールの試合は成り立っています。ダンス部の中の活動が始まって半年が経ち、アメリカカンフットボール部の一部としてチアリーディングが存在することが最も自然な形であると私も、彼女たちも考えるようになりました。自分たちの演技で人を応援したい、スタンツ（組み体操的なもの）を行い競技チアに触れてみたい、ということでの2005年4月からアメリカカンフットボール部チアリーダー「グランドの華」としての



チアリーディングの初期メンバーたち

彼女たちの活動が始まりました。

始まって3カ月

技術は未熟ですが生徒たちの元気、やる気、チアへの情熱には凄まじいものがあり、彼女たちのパワーにいつも私が圧倒されてしまいます。中には運動が苦手、足を上げたことなんてない、という子もいます。中学1年生から高校3年生までという、「体力」「体格」「集中力」の異なる6学年が同時に行っているのだから

大変なことや難しさもあります。しかし、上の学年が、その下の学年を……という風に協力し合い、活動が進んでいます。中学生はまだ筋肉が十分に発達していないので主にダンスや柔軟性を強化し、高校生はαでピラミッドをつくるスタンツの練習を行っています。本格的な活動が始まりまだ3カ月ですが、生徒の成長ぶりに、いつも私が驚かされてしまいます。「運動は苦手、でも汗をかくのは好き」そんな生徒たちが体を動かすことの気持ちよさを知り、自信がなかった表情が生きて生きているのを目の当たりにすると、この場所で生徒たちと関わりあえていることを本当に嬉しく感じます。

（一人ひとりの個性を大切に、まわりの仲間を大切にという本校の教育理念）と〈チアリーディングの特性〉（元気いっぱいの生徒たち）という3つがうまく重なっているなあと彼女たちを見ながら感じています。まだまだ活動は始まったばかり。彼女たちが元気いっぱいの笑顔と声援、チアリーダーとして応援している姿をいつか皆さまに見ていただけたらと思います。

（うちだ あやこ）



一人ひとりの個性を大切に、 まわりの仲間を大切に —チアリーディングを通して—

内田 文子

（国際中学校・高等学校体育科教諭）

3度目の夏

私が国際中・高等学校に勤め、3度目の夏がやってきました。この学校に勤める前の年まで私自身は、大学の体育会チアリーディング部に所属し、競技チアの選手として毎日練習をし、活動してきました。教員として、本校で働くようになってからも一度チアリーディングに関わることがあるとは思っていなかったのですが、2005年4月から、アメリカンフットボール部の中にチアリーディング部門ができ、現在では34人のチアリーディング部員たちと毎日汗を流しています。

礼拝のお話で

私が勤めはじめた一年目の6月、礼拝で説教する機会が与えられました。

当時、私は中学3年生の担任をしていたので礼拝で今、自分が中学生に伝えたいこと、伝えられることは何かを考えました。そのとき「自分が4年間続けてきたチアリーディングを通して、学んだことを話そう」と思い、礼拝のときに選手時代の全日本大会準優勝のビデオを礼拝

堂で放映しました。チアリーディング競技は16人で行うということ、誰か一人が欠けていたら成立しないということ、つらいときは励まし合い声を掛け合うということ、乗る人、乗せる人の呼吸が合わなければ成功はないということ、協調性、信頼関係なしに成立しない競技であるということを生徒たちに伝え、何度失敗しても諦めずに、成功するまで挑戦することの大切さを伝えました。

生徒からのラブコール

ビデオを見て、「チアを教えて欲しい」「私もやってみたい」という声があがりました。帰国生徒も在籍する学校なので、アメリカに住んでいたときに体験したことがある生徒もいました。しかし、怪がつきものの競技であること、新しく部活動になるには私の力だけで無理だということがあり、「教えられないなあ……。」と断り続けていました。

簡単には諦めない生徒たち

「危なくなければいいだろう」と生徒たちは考え、私の元へ来てはビデオを借